

■ 南山大学 人間関係研究センター 公開講演会

「アフリカ独立革命」

～援助に頼らない自立と真の独立を目指して～

2013年5月8日(水) 18:30～20:00

南山大学 名古屋キャンパス D棟B1階 DB1教室

島岡 強 氏

司会(津村):

今回は、「アフリカ独立革命～援助に頼らない自立と真の独立を目指して～」というタイトルで、島岡強さんにご講演をお願いしました。非常に快く引き受けていただきました。

島岡さんは1987年にご結婚されて、アフリカに移られ、今の活動が始まったとお聞きしております。一番新しいところで、『続・我が志アフリカにあり』(株バラカ)という出版物が出されております。私も読ませていただきましたが、とても私の人生を問われるといえますか、「おまえは何のために生きているんだ」というふうなメッセージがたくさんあって、改めて自分自身を問う機会にもなりました。

今日は島岡強氏に講演をお願いしていますが、この本を書かれた奥様の由美子様もお越しいただいています。本日はありがとうございます。

それから、昨年も来日し、ティンガティンガ展のその場で創作をしてくださっています、ムブカさんに来ていただいています。

5月10日から名古屋にてティンガティンガ展が開かれ、ムブカさんもその会場でティンガティンガを描かれる予定です。

島岡さんには1時間ほど話していただきます。最終的な結論は「島岡さんの話は私たちには刺激になるけれども、本当に役に立つのか」と、そのぐらい生き様がすさまじい。そういった、本当に大きな刺激をもらえるお話になるんじゃないかなと思います。60分ほどお話を聞き、30分ほど質疑応答というようなことを考えておりますので、フロアの方々からもご質問がありましたら、ぜひお願い致します。

それでは島岡強さん、よろしく願いいたします。拍手でお迎えしましょう。

島岡：

ご紹介にあずかりました島岡です。島岡強、職業は革命家です。

仕事としては何をやっているかということ、一通り言っておきます。アフリカ・タンザニアのザンジバルというところで、漁業会社、運送会社、それからそのタンザニア製品の日本との貿易、それと柔道を教えています。それらすべてがアフリカ独立革命につながっています。

そういう仕事をしていても、俺自身は漁師ではないし、運送屋でもありません。柔道家でもありません。何かと言うと革命家です。それらすべての仕事が、アフリカ独立革命につながっているから、ということです。

まず、革命家という言葉が皆さんにとってどういうものなのかなと思ってちょっとお聞きしたいんですけど、革命家って何だと思えます？なんか、お答えのある人。どういう意識ですか？

フロア（女性）：

変化を起こす仕事。

島岡：

ほかに。はい。

フロア（女性）：

命をかけて世の中に立つ人。

島岡：

そういうことです。日本で革命家というと、なんか変なイメージを持っている人もいると思うんですけど、革命家というのは一言で言うと、自分に全く関係のない、縁もゆかりもない人たちのために命を賭ける人々、それが革命家です。有名なところでは、ホー・チ・ミン、フィデル・カストロ、レーニン、毛沢東、それからチトー、そういった人たちを革命家と言いますが、その人たちはみんなそうです。そして、自分の国がまだ独立していないという時代だったので、武力闘争をして独立を勝ち取らなきゃいけなかったのです。

現在の世界というのは、基本的に、ほとんどの国は独立していますし、できれば平和に治めていこうという雰囲気・風潮になっています。しかし、特にアフリカなんかは、政治的には一応独立しているのですが、経済的にはいまだに植民地なのです。それを変えるには、武力革命ではない形で改革していくことが必要なのです。

次に、俺が革命家として育ってきた環境について話をしましょう。

物心ついたときに一番初めに教わった言葉というのが、「先憂後楽」で、いつも本にサインする時にも、この言葉を書いています。

「先に憂い、後で楽しむ」という字です。この言葉の意味は、天下の誰よりも先に憂い、天下の誰よりも後に楽しむということなのですが、世の中の全員が楽になれることは絶対なく、不可能です。もちろん俺が先に楽しむことはあ

りません。だから、自分が憂いをもっているいろんなことをやって、それでまたその結果、その人が喜んでくれ、それを見て「ああ、いいな」と思えるような自分であれということです。それが「先憂後楽」です。それを物心ついたときから叩き込まれて、今現在までそれが俺の精神的な核になっています。

子どもの時のちょっとしたエピソードです。

俺の親父はちょっと変わった、というか、一般で言えば気違い親父で、基本的には右翼的アナーキストというのでしょうか。二・二六に影響を与えた北一輝とか、ああいう人たちの思想を継いでいた男で、子どもの頃から、「おまえは革命家になるんだ」と言われて育ちました。

俺には、それ以外の選択肢が全くなかったので、当然のように「俺は革命家になるんだな」と。また、俺もちょっとぼけていて、みんなが革命家になると思っていたんです。俺の同級生もみんな、人間というのはみんな革命家になるんだなと思っていました。それが高校の後は、みんな普通に進学したり就職したりして、あれあれって感じで、「あれ、おまえら革命家じゃなかったの」みたいな、そういう感じでした。

小学校1年のときに、買ってもらった自転車をかっぱらわれたんです。それで、「自転車かっぱらわれちゃったよ」と言って、怒って家に帰ってきたんです。そうしたら、そのときに親父がたまたま家にいて、いきなり殴りつけられました。

親父は、「自転車を買えない人が、その自転車を持って行ったんだ。だから、「ありがとう」と言って持って行ってもらうのが、本物の人間の生き方だ。それを、おまえみたいに「かっぱらわれて頭にきた」などと言うのは、下等な人間の言うことだ」と言って、拳骨を食らわせたのです。一事が万事こういうふうなんです。俺は、自分の自転車をかっぱらわれたのに、親父からそう言われて殴られたので、そういうものなのかなと納得しました。

俺の家はちょっと家庭環境が複雑で、俺には義理の親父がいて義理のおふくろもいるんです。その義理の親父が俺に貯金箱をくれたんです。貯金箱といっても、なんて言ったらいいのかな、ウイスキーの角瓶に、その人が金を入れる穴をやすりで空けて、中が見えるようにしてそこに金をつっ込んでいくものでした。

とにかく、その貯金箱をその人が俺にくれたわけです。金が貯まっていくとか、いろんな金が貯金箱に入っているところはきれいじゃないですか。1円玉なり10円玉なり100円玉なり。それを部屋に置いておいたんです。

たまたまその時に俺の親父が家に帰ってきて、それを見たわけです。それで「おまえ、あれなんだ」と言われて、「いや、貯金箱だよ」と。その貯金箱を「て

めえ、いつからそんな、金を貯めようなんて人間になりやがった」と。それで、それをこのへんでカンカンカンとやって割ろうとしたんですが、割れないので、最後にバンと床に叩きつけて、「おまえ、いつからそんな人間になりやがった」と言ったのです。

学校では「小遣いをもらったならそれを貯めて、なんか有意義なことに使いなさい」とか言われるわけです。ところが、家に帰ると、全くそれと逆のことを言われるという、そういったギャップはありました。

高校3年ぐらいの頃かな。18になると、運転免許をみんな合宿とかで取りに行くわけです。何気なく言ったんです。「いや、みんな免許取りに行っているから、俺も行こうかな」と。それを言った瞬間に、一言で言われました。「おまえ、運転手になるのか」と。

「いや、運転手になるつもりはないけど」と言うと、「じゃあ、別にそんなものは運転できる奴を使えばいいんだ。おまえが運転する必要はない」。もうそれでおしまいです。だから未だに、俺は運送業をやっていて車を十何台持っていますけれども、自分で運転できません。

革命家になるための五つの教えというのがあって、その一つ目が「定職に就くな」。それは一ヶ月幾らで自分を売するような生き方をするんじゃない、と。

二つ目は、「一切の免許・資格を取っちゃいけない」。免許・資格とか、そういうものに頼るような奴は、本物の人間の生き方はできない、と。

三つ目、「日本で仕事はするな」。これは、おまえぐらいの覇気と力で、日本で仕事をすれば、あっという間に億ぐらいの会社はつくれるだろう、と。それをやったらもう最後だ、と。日本で、しがらみにがんじがらめになって、もう外国に出ることはできなくなる、と。とにかく、何もしないで早く出て行け、と。

四つ目、「一切の物を所有してはいけない」。これは、人間、物を所有すると、物を持つと、守りに入る、と。そうしたらもう、それだけで人間は終わってしまう、と。だから、さっきも言いましたけど、俺が向こうでやっている仕事、車十何台、それから船が6隻、俺の家、そのほかすべての物は全部、他人の、現地人の名義になっています。だから、彼らに「この車は俺の車だよ」「この船は俺の船だよ」と言われたら、俺には何の法的な「違う」と言うことはできないんです。だから、それがちゃんと通用するような人間関係をしっかり作って、ちゃんとした仕事をしろ、と、そういう教えでした。

最後は「結婚するな」。これは、おまえは革命家として人のために命を賭けていつ死ぬか分からない、と。そういう時に、後に残した人を悲しましやいけない、と。

でも、親父は親父で、俺のおふくろがいたから俺がいるわけです。そのほかにも女の人があつたし、おふくろはおふくろでほかの人と一緒にいるし。

こんなことをやっているんだったら、ちゃんと一人に決めてちゃんと結婚したほうがいいやと思い、それだけは破りました。

これから志の話になりますが、俺の志の原点というのは、八甲田山にあるんです。

八甲田山は青森にある山なんですけれども、俺が17歳、高校2年の時です。

人のためにおまえは生きろと言われて、革命家だと言われて生きてきて、お前は革命家として、人のために生きろ、と言われながら生きてきたので、俺ともう一人ほかの人がいて、一人分だけの飯がある、と、そういう時に、俺が食うかおまえが食うかという時に、「おまえが食えよ」と言うことはできると思ったんです。ただ、俺が死ぬかおまえが死ぬかといったときに、「じゃあ俺が死ぬからおまえ生きろよ」と、さっそう言えるかなと思った時に、やっぱりちょっと疑問があったわけです。いや、ちょっとこれはまずいなと。こんなことで、やっぱり革命家として生きていくことはできないんじゃないか、と。これは一度、命をかけて死に行かなきゃいけないな、と思って、八甲田山に行きました。

なぜ八甲田山に行ったのかというのは、その時ちょうど「八甲田山」という映画がありまして、ここにいる人で知っている人もいると思うんですけども、その当時の軍隊が、日露戦争前にロシアと戦うことを想定して、雪中行軍をその八甲田山でするわけです。そこでみんなが遭難して210人中199人凍死して11人が生き残ったという、そういう映画があって、ものすごい吹雪の中をばたばたみんな死んでいくんですけど、ここだ、ここにとにかく行こう、と思いました。

その年の真冬、1月の1日か、2日だったかな。その山に入って、そうしたら案の定、遭難です。それまで山なんか一度も行ったことがないんだから。かんじきというのがあって、その履き方も分からない。服は他人から借りた服で、登山靴で。それで行って、頂上まで登って、避難小屋まで下りて、そこで吹雪がばあっと吹雪いてこられて、そこに閉じ込められたんです。

そこに一人で9日間閉じ込められて。一回表に出て行って。下山予定日が2日後ぐらいだったんです。今日帰らなかったらみんな心配すると思って。その山小屋、避難小屋から150メートルぐらい出たところで、雪がここまで常に埋まっている状態なんです。掻き分けて足一歩出すという。これはもうどうしようもないと、もう引き返そう、と思って、引き返そうと思ったら、もう避難小屋が見えないんです。

しょうがないから、もうそこに雪洞みたいなのを掘って、そこに4～5日いたんですかね。そのときに、眠くなったりするわけじゃないですか。でも、眠ったら死ぬんで、しょうがないから登山ナイフで自分の腕を切って、目を覚まして。

狭いところで一人ですっと、誰もいないじゃないですか。そうしたら、だん

だん精神的におかしくなってくるんです。妄想なのか現実なのか分からないような状況が続いて。

そこからしばらくしたら、その避難小屋がちらっと見えて、避難小屋に帰って1日かしたところで、捜索隊の人たちが上がってきてくれて、そこからは自力で下りました。

雪の中にいたときに、何が一番つらかったか。何だと思います？そのとき、食料が全然なくて、2日分の食料を持って、1日目はその避難小屋に入ったとき、その食料全部食っちゃったんです。食料もない、防寒も十分じゃない。そういう中で、何が一番きつかったと思います？

フロア (男性) :

飢え。

島岡 :

そうじゃないんです、孤独なんです。自分一人しかいない、生き物が全く周りに生息しない。ただ雪しかない。だから、そのときに本当に最後に思ったのが、その時に俺が一番嫌いだった同級生がいたんだけど、そいつでもいいからこの場においてほしい、と思ってね。あれで、やっぱり人間というのは本当に大切なんだと、それが分かりました。

だから、そこから生還した時、やっとこれでも俺はいつ死んでもいい、と。本来一旦死んだ命なんだ、と。ここからが革命家としての本格的な人生だというその志が、ここではっきりと決まりました。そこから、今49になりますけれども、一度もその自分の志が、ぶれたことはありません。

高校を出て、大学は一応、そこでアフリカ独立革命の同志を見つけようと思って行ったんですけども、そんな奴がいるわけもなく、毎日、酒の話、女の話、マージャンの話。そんなことしかないの、こんなところにいたら腐っちゃうなと思って、半期で大学を辞めて、そこから約5年間ぐらいフリーライターとして世界中、約60か国ぐらいかな、いろいろ回りました。

世界を見ていく中で、それをアフリカ独立革命に生かしていこうと、どういう国づくりをしていったらいいのかと、その国の制度がどういうふうで、人々がどういうふうになっているのかと、それをそのときに学びました。

1987年、アフリカ独立革命をしに、本格的にアフリカに腰を据えよう、と、タンザニアのザンジバルに拠点を置きました。当初は、南アフリカのアパルトヘイト人種隔離政策というのがありまして、それを叩き潰そうと、そのための武力闘争に加わろうと思って、まず行ったわけです。

その南アフリカの近隣国で第一次産業、第一次産業というのは、一番貧しい人たちが関わっている仕事なので、それをしながら、そういう人たちがどういう国づくりを考えているのか、南アフリカの情勢とかそこに入るタイミングとかを見ながら、そこに入ろうと思っていたんです。

それをやっていうちに、1990年だったかな。マンデラが釈放されて大統領になって、事実上アパルトヘイトはなくなりました。そうなったときに、革命家としてどうしたらいいか、と。アフリカ人の意識革命、その経済革命。さっきも言いましたが、アフリカというのは政治的には独立しているけれども、経済的に独立していない。それで、意識革命、経済革命をしていこう、と考えました。

ザンジバルに着いた当時、着いてすぐにです。地元の職にあぶれた漁師たちが俺の周りにいっぱい集まってきて、「自分たちは漁師で、仕事をしたいんだけど行く船がない」と。「だから、船を造ってくれないか」という話から、「じゃあ船でも造るか」ということで、船造りをやり、漁業を始めたんです。

そんなことをやっていたら、地元の若い奴が俺の家いきなり来て、「柔道か空手かクンフーか何をやってたか」と言うので、「柔道はやってたよ」と。俺は、小学校1年から大学1年まで柔道をやっていたので。そうしたら、「柔道を教えてくれないか」と言われて、柔道を教えることになったんです。

柔道を教える、といっても何もないわけで、道場もなければ、畳もない、柔道着もない。そういう状態で、とにかくそのへんのビーチに連れて行かれて「ここで教えてくれ」と言われて、そこで取っ組み合ったり、相撲みたいなことをやって、腕立て伏せをやったり、そんなことをやっていました。

そんなことをやっていたら、ザンジバル政府、その当時社会主義で外国人に対する規制がすごく厳しかったんです。その当時は格闘技が禁止だったんです。格闘技を教えるということは、イコール、革命軍を組織するというふうに思われたんです。要するにそれをやったことで、国外退去を食らったりしました。

それと、いきなりアフリカに、俺が、そういう日本人が行ったことで、リッチな国である日本人がアフリカにいきなり来た、それで、なんか分からないけど、いきなり漁師たちを集めて船を造ったり、なんか漁を始めた、というのは、すごく向こうにしてみれば不気味なわけです。今になると分かるんですけど、例えばあそこにいるムブカみたいに黒い人がいきなり日本に来て、どこかの漁村にぱっと行って、その漁師たちがみんなあいつの周りに集まって漁を始めた、ということ想定してみると、すごく不気味じゃないですか。

でも、そのほうがはるかに理に適っているんです。なぜなら、貧乏なアフリカからこっちで漁業をやれば、儲かるじゃないですか。ところが、我々リッチな国の日本人がアフリカで、そんな儲かりもしない漁業をやるなんていうのは、向こうにしてみれば何やっているのか分からないわけです。狂気の沙汰だと、絶対なんか変なことがあるに違いない、と、だからそれで、スパイ容疑です。

柔道を教えた、イコール、革命軍を組織する。もう一つはスパイ容疑、何をやっ

ているか分からない、何か探ろうとしているんじゃないか、と。三つ目の容疑が、その頃いろいろな旅行者が、今でもそうですけれども、いきなり訪ねてくるわけです。いきなり来て「泊めてくれないか」と言うので、「しょうがない。いいよ」と言って泊めて、しばらくいて、また出て行って、それからその話を聞いた奴が、また来るわけです。だから年間100人ぐらい旅行者が、俺の家にずっと泊まっていたと。

その頃は社会主義で、旅行者はホテルに泊まらないといけないという法律があったんです。それを俺が破った、と。それと同時に、闇のホテル業をやっているんじゃないか、と。その三つの容疑がかけられたわけです。

そしてその後、約6年間、秘密警察に張られて、監視下の生活になりました。だから、家から出た瞬間から誰かが付いているのです。一発で分かるんです。みんなは街で汚い格好をしているのですが、ちょっと小綺麗な格好をしているのが必ずその中に混じっているんです、何気なくこうやって見ていると。どこに行っても、漁師たちのところに行っても船の修理をしても、食堂で飯を食べていても、必ずそういうのがいました。その後、柔道を5年間ぐらい禁止されたので、柔道はしなかったですけども、とにかく秘密警察が絶えず付いていて、それが1993年ぐらいまで続きました。

そういう状況の中で、雇用を少しでも増やそうということで、漁業を始め、今は船が6隻、運送会社と両方で、常時150人ぐらいを雇用しています。それと、原材料を輸出するのではなくて、製品を輸出する貿易で外貨を入れて国を回していこうと。そういうことで、今から12～13年前より貿易の仕事を始めました。

とにかくアフリカでは、まず産業が無いんです。だから、仕事をしたいと言っても、会社がない、仕事をする場所がない。やるとしたらそのへんでどこかの物を仕入れてきて、それを道端に置いて売るとかね、店を構えるだけの資本のない人たちは、結局、そんなことしかないわけです。

タンザニアの主産業というのは、基本的にコーヒー、紅茶、綿花、カシューナッツ、これらはすべて、原材料のまま先進国に買い叩かれて、先進国は、それを何倍もの付加価値を付けて販売するわけです。

タンザニアはどうするのか。自分たちがコーヒー豆の原産国でありながら、ネスルから何倍もの高い金額で、インスタントコーヒーを買うわけです。紅茶なんかにしても、結局紅茶の原材料を輸出して、トワイニングとかリプトンとかブルックボンドから、ティーバッグの紅茶を何倍もの金額で買うわけです。綿花というのは、要するに布、綿ですが、それを原材料で売って、先進国で作られた服を、何倍もの金額で買うわけです。

このような馬鹿げたことをずっとやっていたら、このシステムを続けていく限り、アフリカ諸国というのは、半永久的に植民地です。そこから抜け出すこ

とはできません。

だから、少しでも製品化して、それを先進国に売って外貨を国に入れて、それでこの国の経済を回していく。それが趣旨で13年ぐらい前に「バラカ」という会社を作って、貿易の仕事をしています。

その一環としてティンガティンガという絵画、アフリカの絵なのですが、アフリカで絵というのはすごく少なくて、その中でもタンザニアが持っている一つの大きな文化です。そのティンガティンガ・アーティストが、あそこにいるムブカです。俺は嘘をつくのが嫌いなのではっきり言いますが、俺ははっきり言って絵に何の興味もありません。けれども、この絵が欲しいという人は結構いて、俺のところに来た連中とかがティンガティンガ村に行きたいと言うので、何回か連れていったことがあるんです。そのたびにアーティストたちから、「ティンガティンガを日本でプロモートして売ってほしい、定期的に買い上げてほしい」ということを何回も何回もしつこく言われたので、「しょうがない。じゃあ、やろうか」ということになったんです。

それをするには日本で展示会をしていかないといけない、と。日本で展示会をするからには、今までみたいなみやげもの感覚で、それをアートの域まで高めないと、そういうことはできないよ、と。基本的にみやげものとして、向こうで描いて旅行者に売っているわけです。だから、日本で展示会に出すだけのクオリティーの高いものをお前らちゃんと描け、と言って、彼らにそういう絵を描いてもらって、こういう展示会をしています。

それが5月の10日から始まって19日まで、そこに書いてある「余白」というギャラリーで開催されます。

その余白さんというところは、責任者の人がアーティストなのです。「余白」という名前もそうなのですが、あまり壁に絵をいっぱい置いてほしくないんです。

アフリカのティンガティンガ工房というのがダルエスサラームにありまして、そこの再現をその会場でしたいわけです。そこに行くと、壁一面に絵がバツと飾ってあるわけです。

初めの頃はその人とよく揉めて、そんなにいっぱい絵を置かないでほしい、と。でも、自分たちはそれを再現するために来ているのだから、と。しかし、最近ではそれをちゃんと理解してくれて、応援してくれています。それも年々盛況になり、今回横浜は4回目、横浜のほうも大盛況で終えて、今日名古屋入りしたのですが、それがもうすぐ開催されます。皆さん、よければいらしてください。

では、柔道の話に入りますけれども、ザンジバルの青年たちに頼まれて柔道を始めたのです。1992年に格闘技が解禁になったと。さっきも言ったけれども、

はじめは「青空道場をここでやれ」と言われて、やれと言われた場所がただの荒地なのです。草がぼうぼうで、これぐらいの草がバーッと立っているところです。

まず、「教えてくれ」と来た連中に、「それを全部刈れ」と。それを全部刈って、その下の砂を掘り起こして柔らかくして、それをさせました。そうすると、奴らが文句を言うわけです。「俺たちは柔道をしに来たんだ。草刈をしに来たり、土を掘り起こしに来たわけじゃない」と。「ああ、そうか。それだったらちょっとお前、かかってこい。何でもいいから俺のことをつかんで投げてみる」と。それで、かかってくるわけです。

背は俺より低いのですが、体は向こうのほうがみんながっしりしていて、ごついけど、何にも格闘技を知らないので、かかってきても、ただ押ししてくるだけで、もろに叩きつけて、わざと相手が痛むように、後ろに倒す瞬間に裏技で肩をあごに入れるんですよ。そうすると、もろに頭を打って、半失神状態になるわけです。

そんなことをやって、「どうだ。こここのところでやるか」と。すると、向こうもしょうがないので「分かった」と。そういうふうにはやっていかないと、何もできないんです。そうやって草を刈らして、下を整地して、まず始めに米の入っている麻袋を開いて縫い合わせて、カーペットみたいなものを作って、その上でやりました。

そこで1年間ぐらいかな、やったら、たまたま日本から俺の友人で、柔道をやっている奴が来て、柔道をやっていたので、「一丁やろうかな」と言って、やったんです。乱取りをやって、そいつが技をかけてきて、それを俺が交わして投げに入ったときに、すごい勢いがついちゃったんです。投げたときにもろに肩口が脇腹に入って、あばらが折れちゃったんです。それで、そいつは「ああっ」と言って動けなくなって、「大丈夫か」ということになって、そのときに初めて「島岡さん、これはこいつらに根性がないんじゃないって、下が固すぎるんだ。畳を入れないといけませんよ」と。俺は「そうかなあ」と。それで友人たちが一生懸命動いて、畳が入って、そういうところから柔道が始まっていきました。

2002年にザンジバル武道館という武道館を、日本の体育館ぐらいの道場を作りました。そこからいろいろな国際大会とか何とかに出るようになって、2003年に大阪でやった世界選手権に初めて出場しました。

そして、2007年から東アフリカ大会と言って、東アフリカの国々が全部で10カ国あるのですが、そのうち柔道をやっている国は五つぐらいしかなくて、その国が集まって試合をするのですけれども、ザンジバルとタンザニア本土は別のチームとして出るのです。その中で我々は、7回やったうちの4回優勝していますから一番強いんです。今はそこまで成長しました。

ザンジバルというのは、ザンジバル本島とペンバ島という二つの島があるの

です。その二つを総称して「ザンジバル」というのですが、そのペンバ島に武道館を建ててほしいという政府からの依頼と日本大使館からの依頼で、それが、俺が帰ってからすぐの7月から着工することになります。たぶん年内に仕上がって、来年1月12日の革命記念日にオープニング、ということになると思います。それもザンジバル武道館と同じぐらいの、体育館と同じぐらいの規模で、現在、ペンバ島には一切室内のスポーツのできる会場が無いんです。それを初めて今回造るので、柔道だけじゃなくて、空手、バドミントン、バスケット、バレーボール、卓球とか、そういうことができる施設になります。

このようにいろいろな仕事をしていますけれども、これらはすべて、基本的にアフリカの人々から頼まれてやったことです。漁業も運送業も貿易も柔道も。それが基本的に俺の志すアフリカ独立革命ということです。

変な話になりますけれども、こういう教育を受けてずっと育ってきたので、俺は基本的に金のために働いたことがないんです。自分で思うのですけれども、食うために働くということが理解できないんです。そういうことを考えたこともないので、それはやっぱり俺が人間として致命的なところだなと思います。

今回のことも、先ほどおっしゃいましたけれども、ここの大学の津村教授から依頼されて、俺のほうから出した条件というのは、一切の報酬を受け取らないこと、もう一つが、何でも好きなことを言う、放送禁止用語もあると、その二つが条件だということでした。なぜなら、俺は革命家であって、講演屋ではないからです。講演屋というのは講演をやって、金をもらって金を集めて、それで生活していく連中じゃないですか。俺はそうじゃないですから、講演屋じゃない以上は報酬を受け取ることはできませんから、それは断りました。

今まで何度か頼まれてドキュメンタリーのテレビの出演とかをしましたけれども、出演料はもちろん、当然コーディネーターとか通訳ができる奴がいないので、基本的に俺が一人三役、全部することになるわけです。でも、出演料・コーディネーター料・通訳料は一切いらない、と。その金を全部、そのテレビのスタッフの連中のみやげ代にしてやるんです。みんな大喜びして、みやげを買って帰るのですが、領収書だけ一応書いてやって、「これだけでも間に合うか」と、そういうふうになっています。

俺は基本的に、金さえもらわなければ何でもやるんです。何かをして金をもらおうということになると、一遍にやる気をなくしちゃうんです。金のためにやるのかと思うと、ぞっとするんです。

では、どうやって生活しているのか、と、みんな思うと思うのですが、タンザニアでは、漁業とか運送業から入ってくる金で十分生活していけますし、それなりにちゃんと、来る奴の面倒は全部見られるし、貿易でもちゃんと利益が上がっているんで、それなりに金が勝手に入ってくるわけです。でも、ほとんど使うことがないので、欲しいものは別に何にもないし。だから、入ってき

て貯まった金はまた次の事業に使うし、ということで、あまり金に困ることもないです。

俺の言いたいことは、生活するために金を稼ごうとか、金を稼ぐためにビジネスをしなければいけない、とか思わなくても、人のためになる仕事をちゃんとやっていき、それらを一つ一つ形にしていく、そして結果を出していけば、人間、決して食うに困ることはない、ということです。これは俺が実際に証明していることですから、信じてもらってかまいません。でも、それにはやっぱり、常にすべての私利私欲を捨てること、それが前提です。そうすれば、絶対金に困ることはありません。

基本的に、人というのは馬鹿にしたものじゃない。人の頭の手を追っていると、人がちゃんと自分の頭の手を追ってくれるんですよ。

基本的に、人間と人間の付き合いというのは、鏡みたいなものなんですよね。自分が相手に対して謙虚に接すれば、相手も謙虚に接してくれる、傲慢に接すれば、相手も傲慢に接してくる、自分が攻撃的に出れば、相手も攻撃してくる、相手に対して思いやりを持って接すれば、相手も思いやりを返してくる、それが回り回ってでもね、基本的にそういうものなんです。だから、それを信じ切る気持ちを持つことですね。

そして、常に等身大の自分で生きること、これがやっぱり一番大切なことです。決して自分を大きく見せる必要はない。5ぐらいの自分を7とか8ぐらいに見せて、「俺はこうだ」とかと言う奴は馬鹿です。逆に、結構力があるのに、「いやあ、私はそんなことできませんよ」とかね、そういうのも俺に言わせれば馬鹿です。だから、大きく見せる必要もないし、小さく見せる必要もない。「俺はこうだ」、「私はこうだ」、それでいいんです。

人間というのは、素のままの自分を見せるのは結構怖いんです。だから、どうしてもそういうふうに、「できませんよ」とか言って、「あなた、すごいじゃないですか」と言われたら気持ちがいいじゃないですか。みんなそれを狙って、そういうふうに言うと思うのですが、そういうことは無意味です、時間の無駄。人生は短いわけですから、いかに無駄を省いて生きるかということですからね。常に等身大の自分で、人に対して思いやりを持って接する、それがやっぱり人生の基本だと思います。

それとあとは、よく人間は、特に知識人とかは、「人間一人では何もできない」とか、「個人の力はたかが知れている」とか、そういうことをいろいろ言うじゃないですか。とんでもないです、そんなことは決してない。しっかりと志を持ち、それに向かって命を賭けてしっかりと進んでいけば、一人の人間の力というのは、力とか志というやつが多くの人間を動かして、必ず世の中を変えていくことができるんです。だから、一人の人間の力というのは、決して小さ

くない。だから、それにはやっぱりしっかりと志、信念、それに向かってまっすぐに進んでいくその気持ち、それさえちゃんと持っていれば、一人の人間が世の中を変えていくということはできるんです。

だから、特に若い人はこじんまりとまとまらないように、壮大な志、希望、そういうものを持って、これからどんどん自分ででかくなろう、という気持ちを持って生きていってほしいと思います。

志の話に戻りますけれども、志とは何か。自分が長い歴史を構成する中で、自分は何の役割をもって、担って生まれてきたのか、それを真剣に考えることです。ただ、意味無しに生きているんじゃないくて、金を稼いで飯を食うために生きるんじゃないくて、人のために何ができるのか、歴史を形成していく中で自分に何の役割があるのか、そういうことをしっかりと考えていくことです。それを常に天に問いかけていくということ、それが俺の場合はアフリカ独立革命であったということです。

だから、みんなそれぞれの職種、人それぞれいろいろですから、それは別にサラリーマンであっても職人さんであっても、何でもいいわけです。そのやることに對して、何のためにその仕事をするのかということ。金のためじゃなくて、それはどう人のためになっているのか、そこから入っていくべきだと思うんです。その気持ちの持ち方で、同じ仕事をするのも全然違うんですね、これは。食うためにここにペンキを塗るのかと思ってやるのと、人のためになるからここにペンキを塗るんだと思ってやるのと、全然違ってくるんです。そういう気持ちを持って仕事をしていく。だから、職種は何でもかまわないと思います。

「職業に貴賤なし」と言いますがけれども、その通りで、別に革命家だから偉いとか、そういうことでは全然ありません。どんな職業でもそれはできることです。だから、みんなそういう、とにかく志をしっかりと立てて、それで生きていってほしいと思います。

今日、ここに集まっている皆さんも、まず、しっかりと志を立て、等身大の自分で、人に対する思いやりというのを決して忘れずに、一つ一つ前のことを形にしていき、最終的には世界を良い方向に変えていけるように、しっかりと生きてください。一緒に頑張っていきましょう。

人は死んでも、志というのは次の世代に引き継がれていきます。

例えば、俺が死んで、おそらく俺と同じ人間は出ないでしょう。ただ、俺が死んで、俺の志というのは、それぞれの分野で引き継いだ人間が、引き継いでいってくれると思います。その人が死ねば、それをまた誰かが引き継いでいくでしょう。だから、志というのは絶対死なないんです。それはすごく重要なことで、そいつが死んだらそれで終わりということではありません。

自分がしっかりと生きるということ、そして次の世代への希望。現在の状況を嘆くばかりじゃなくて、よく言うじゃないですか、「これはもうどうしようもない」とか「日本の政治家はどうしようもなく」と、そんなことをいくら言ったところで、何にもならないんです。自分が周りを変えていこうと思わなかったら、周りばかり恨んで、自分は何にもしないで普通にのうのうと生きて、人の批判ばかりして、全部人のせいにしていたら、何にもならないですよ。「自分がやったことはすべて自分の責任だ」という、そういう気持ちをもって、そういう責任感で、やっぱり人間というのは生きていくべきです。

とにかく、人間というのは現実の中で生きていくしかないんです。そこから逃げることはできない。だから、まず今、今日、この日から始めましょう、いろいろなことを。そして、確実に世界が良い方向に向かえるように、みんなで努力をしていきましょう。

最近、すごく耳につく言葉が、「お前、これ食うか。これ飲むか」と聞くと、「大丈夫です」と言うのですね。言うでしょう、若い人たちは特にね。「大丈夫」という意味、分かりますか？「大丈夫」というのは、決してものを断るときに使う言葉じゃないんですよ。

「大丈夫」というのは、孟子の言った言葉で、『天下の広居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行く。志得れば民と之れに由り、志得ざれば独り其の道を行い、富貴も淫すこと能はず、貧賤も移ること能はず、威武屈する能はざる。此れを之れ大丈夫と謂ふ』というのですね。

簡単に言うと、天下という広い家に俺は住んでいるんだ、と、それが「天下の広居に居り」です。「天下の正位に立ち」というのは、天下のど真ん中に俺は立っているんだ、と。そして「天下の大道を行く」、自分の志に向けてまっすぐ自分はその大道を進んでいくんだ、と。ちょっと脇道に反れるといい金もうけの話がある、と。そんなことに自分は決して心を動かされることはない。ちょっとまた進んでいったら、貧しい状況に置かれることになった、と。どんな貧困に置かれることになっても、自分の志は一切変えない。さらに進んでいくと、向こうから、10万人の軍隊が「お前の志を変えろ。じゃないと殺すぞ」と言ってきても、「ああ、上等だ。殺せばいいじゃないか。お前が殺しても、俺の志は後に引き継がれて生きていくんだ」と。そういうことができる人間を「此れを之れ大丈夫と謂ふ」というのですね。

「大丈夫」というのは、そういう言葉であって、その先を拒否するときとか、物は腹がいっぱいでいりませんというときに言う言葉じゃないんです。だから、これからこれを聞いた人は、そういうときに大丈夫という言葉を使わないでください。

大体これで1時間ぐらいかな。これから先は、質疑応答に替えていきたいと思えます。

最後に、タンザニア・アフリカの経済・文化、そしてスポーツ界の発展を祈って、グッドラック。

(拍手)

司会（津村）：

どうもありがとうございました。そして、予定通り30分ジャストあけてくださいました。質疑応答の時間を取りたいと思います。このやりとりの中でまた島岡さんの生き方、もしくは今の活動を理解する時間になればと思います。フロアの方からご質問がありましたら、はい。

質問者 1：

今日はどうもありがとうございました。

いろいろな容疑をかけられたということで、国外退去にもなったということなんですけども、どういうところからこうザンジバル政府が受け入れるように変わったのか、手ごたえというのはどこから感じられたんですか。要するに、国外退去になってまた戻って来られたということですよ。

島岡：

やっぱり、6年間秘密警察とかが張ってみて、逆さにしても何をしても変なことが出てこないじゃないですか。どう考えてもスパイでもないようだし、ちゃんと漁業もやっているし、漁民はちゃんと食えているし、と、こいつはいいことをやっているのじゃないか、と思ったんじゃないんですか。雇用も確かに増えてるし、柔道も1992年に解禁になって、それからほとんど大きくなって強くなって、今では試合に出るたびにメダルを取ってくる競技は、ザンジバルでは柔道しかないのです。

だから、やっぱりそれは当然認められることになるし。だから、そういったことからでしょうね、認めざるを得なくなったということなんですよ。

好意的になってきたっていうのは、ザンジバルでは、俺は日本大使館から依頼を受けて、基本的に非公式な領事部なんです。だから、基本的にザンジバルで旅行者が病気になったとかいっても、結局全部俺のところに電話がきて、俺のところに呼んで、そこで医者を呼んで治療させたり、協力隊の面倒を見たりしているので、認めざるを得ないんですよ。

質問者 1：

国外退去のときには、その辺りの国に滞在していたのですか。

島岡：

国外退去で一旦出て、帰ってくることはできるんで。

質問者 1：

ああ、そうか。

島岡：

永久追放じゃないですから、だから、一旦出て帰ってきましたけどね。

質問者 1：

そこは緩い？

島岡：

ええ。

質問者 1：

よくわかりました。

島岡：

はい。

司会（津村）：

よろしいでしょうか。

じゃあ、そのほかご質問の方、ぜひ、はい、お願いします。

質問者 2：

島岡さんは、どんな世界になってほしいって願いますか。

島岡：

世界っていうか、まあ俺の場合、アフリカのことが一番大きいので、アフリカの国々が先進国の援助を一切受けずに、政治的にも経済的にも独立していけるようになるということです。それが、まず第1目標です。そこまでかなりかかると思うので。これで回答になっています？

司会（津村）：

どうですか、大丈夫ですか。

質問者 2：

はい。

司会（津村）：

はい。

質問者 3：

今日はどうもありがとうございました。

私、最近フィリピンのマニラで、ゴミの山で現地の子どもが屑拾いをしながら生活するビデオをちょっと見て、かなりショックを受けたんですけども、世界でもっとも貧しい大陸っていうのがアフリカだと言われるんですが、そのへんのところは五十数か国歩いていらっしゃった島岡さんは、どういうふうに見ておられていますでしょうか。フィリピンの貧しさっていうのは、アフリカとはまた違ったものがあるんでしょうか。

島岡：

当然アフリカでも全部そうですよ。ゴミに集っていますよ、みんな子どもは。大人も集っていますから、子どもだけじゃなくて。大人がまず一番いいものを取って行って、それから子どもですよ。でも、やっぱりアジアのほうが、アフ

リカよりはましでしょうね。その両方を見ていて、アフリカの貧しさは、やっぱり桁が外れていますよ。だから、やっぱり体が二つあればアフリカとアジアで両方したいのですが、体一つしかないから、俺は基本的にはアフリカと思っています。

司会（津村）：

はい、よろしいでしょうか。

じゃあ、前のほうから質問がありました。

質問者4：

こんにちは。今日は素敵な革命家の話をありがとうございました。

一つ質問させていただきたいのですが、最近20～30年、10年間ぐらいの間で、中国の投資によってアフリカがだんだん豊かになっていて、そういうことがニュースとかではずっと語られているのですが、島岡さんはザンジバルで経済的な豊かさとかは、どう感じていますか。

島岡：

豊かになっているかどうかってこと？

質問者4：

はい。

島岡：

昔から比べれば、確かに豊かになっていますよ。確かにそれはそうですね。車なんかも増えたし、道路なんかもだいぶ綺麗になったし、便利になってきましたしね。みんな携帯電話持っているし。向こうだと携帯電話って40ドルぐらいで買えます。30ドルか40ドルぐらいで買えるんで、だから、みんな携帯電話持っているんで、やっぱり俺なんかが行った頃から比べれば、そういう面では豊かになってきたんでしょうね。

司会（津村）：

質問はいい？中国のことはいいですか、今ので。

質問者4：

はい、ありがとうございます。

司会（津村）：

じゃあ後ろ、手が挙がりましてので。

質問者5：

向こうの人が、柔道をしたがる理由は何ですかね。ボクシングとかマラソンとかが、もっとアフリカの人に向いているスポーツだと思うんですけど、柔道はアフリカの人の筋力のできかたを見ても、強くならないような気がするんだけど、なんでやりたがっているのか、それをちょっと教えてほしいんですけど。

島岡：

初めはセルフディフェンス、要するに自己防衛をするために入ってくる人が多いです。基本的に強くなりたいっていうことじゃないですかね。確かにマラ

ソンとか有名ですけども、あれは基本的にプロですから。

ちょっとマル秘話をしますけども、タンザニアって、結構いいランナーがいるんですよ。でも、オリンピックや世界選手権で金メダルを取っても、政府からはほとんど金が下りません。せいぜい携帯電話の会社から200ドルとか300ドルとか、日本円で2万円とか3万円とかで、全部合わせて10万円ぐらいの金しか入らないんですよ。

日本って、好きじゃないですか、マラソンが。だから日本で、マラソンのペースメーカーをやるんです。30キロぐらいまで先頭で引っ張って、もっと走れるのにわざと脱落するわけです。それを、1レース走ると100万円もらえるんですよ。だから、オリンピックで金メダルを取るより、そっちのほうが遥かにいいわけです。

基本的に生活が貧しいから、名誉とかなんとかよりも、金ですからね。彼らは、プロに徹していますよ。だから、決してタンザニアのランナーが弱いわけではなく、そっちのほうに力を注いじゃっているんです。だから、そのタンザニアのランナーがあんまり最近有名なのが出てこないのは、そういうことです。

司会（津村）：

よろしいでしょうか。はい、後ろ上がりました。白い服の方。

質問者6：

こんにちは。

私はタンザニアに教育支援をしております、2年前に北のほうに職業訓練学校の第一校が、現在南に第二校の学校がほぼ完成してます。で、ザンジバルには島岡さんのお宅の近くに洋裁学校、中古の住宅を買ってそれを改修して、ほとんど完成しております。そこへ日本の一般家庭でいらなくなった、ミシンとかパソコンとか農機具、大工道具等を、本土のほうの南のほうには、20フィートコンテナで3本、ザンジバルには、洋裁学校のほうにミシン等十数台とかいろいろなものを詰めて、先月の6日にザンジバルの港には入っておるんですが、まだその教育支援物資が港から出してもらえない。そうすると、1日に保管料としてコンテナに50ドルですか。それと、コンテナの賃料がどんどん嵩んで、それで、第二校のダル・エス・サラーム（Dar es Salaam）のほうでは3本のコンテナがやはり出ない。それで、現地のマンマサ市の市役所のほうに、教育支援のものだからノータックスでお願いしたいということで、だったら、市役所のほうから、何十パーセントの物資を市のほうにくれるんだったら許可を出すけど、それでなければ出さないということで、今大変困ってるんです。これ、なんか解決方法というのが。

まあ過去に2回コンテナ送ってるんですが、一番最初は3カ月かかってやってもらえました。2回目は2カ月です。その勢いでもって、1カ月で出るかと思ったら、もう1カ月過ぎとるんです。それで、今大変悩んでおるものですから、ちょっといろいろなものを輸出入しておいでになるから、なんかコツがあっ

たら教えていただきたいなと思ひまして。よろしくお願ひします。

島岡：

いや、コツといつても、俺はそういう援助物資に税金かけられたことないんで。

簡単なことは、税関の人間を子分にしちゃうことです。それが一番手っ取り早いというか、それが一番じゃないですかね。一言で言っちゃえばそういうことなんですけど、それは個人的にどうするんだっていうことであれば、また後日相談に乗ります。

司会（津村）：

よろしいでしょうか。はい、ほかには、前のほうに。

質問者7：

本日はお話ありがとうございました。

私はアフリカに興味があるのですが、それは南山大学のコンゴ人の先生をきっかけに、その先生の人柄に興味を持ってからアフリカに興味を持ちました。でも、その前のアフリカのイメージは、私にとってすごく貧困とか貧しいとかそういうマイナスイメージがあつて、で、先生に遭つたからこそアフリカに興味を持つことができたんですが、実際に今度は周りにアフリカってこういういいところがあるんだよつて言うときに、やっぱりそういう貧困とかマイナスイメージの壁があると思うのですが、島岡さんは周りにどういふうに、アフリカの魅力を伝えてありますか。

島岡：

結局、やれ貧困だ、なんだつて言いながら、別に餓死しているわけでもないわけで、なんとか生きてるんですよ。ただ蓄えがないというだけで、はっきり言つて銀行の口座を持っている人つていうのは、1パーセントもいるのかな、ほとんどの人は持つてないです。で、宵越しの金なんかほとんど持つてないし、でも、なんだかんだ言つてみんな助け合いながら食つてるんですよ。別にそういうふうだからといつて、貧しくて生きていかれないから首をくくるとか、そういうことはほとんどないわけです。

だから、アフリカの一番の魅力は、どんな状況であつても、やっぱり彼らはたくましく明るく生きていくところじゃないですか。基本的にみんな陽気だし、あまり深く落ち込むつてこともないし。それは逆の面で困るんだけど。

でも、そんなことでいちいち落ち込んでいたらやつていけないですから、それがアフリカの魅力じゃないですか。やっぱり旅行とかで行くのであれば、タンザニアは世界で一番動物の多い国だし、キリマンジャロもあるし、観光スポットは結構いっぱいありますから、行けば楽しいと思ひますよ、よつほど変な目にさえ遭わなければ。

ティンガティンガ展とかで来る人に、新聞社とかからインタビューを受けるときに言うんだけど、そういうマイナスのイメージばかりであるけれども、

決してそうではなく、貧しいながらもみんな、明るく楽しくその日を生きている。

実際、ああいうティンガティンガという絵画があつて、日本だったら、画家ではなかなか食えないじゃないですか。でも、彼らはそれで食っているわけです。だから、そういうところは、やっぱりみんなに見てほしいなと思います。

質問者7：

ありがとうございます。実は私学生ボランティアとしてジャイカで今度5月26日に「アフリカ総選挙」というイベントをします。学生としてアフリカの魅力をどう伝えられるかっていうのをやろうと思っているので、今の話を生かして、もっと身近なアフリカを紹介していきたいなと思っています。宣伝になっちゃいますが、ぜひ「アフリカ総選挙」へ来てください。ありがとうございます。

司会（津村）：

はい、どうもありがとうございます。あっ、手が拳がりました。真ん中の方。

質問者8：

大変破天荒な性格にびっくりさせられたというのが、まず第一印象でございます。

それから、アフリカに、日本でも私の友人でも柔道を教えに行っていて、なかなか柔道の参加費用が出ないから、運賃とか出ないから、鶏を飼って卵を産ませて、それを売って大会に参加させたっていう者もおります。これだけいろいろ今中国のほうからも援助というのも、最近ずいぶん多く増えているってことも聞いておりますが、これだけ愛情が注ぎ込まれていながらも、今、教育の物資さえ何カ月か止まってしまうというこういう状況があるようです。これはもう行政、政府のほうの何か、まあ帰ってから困られるような発言はよろしいですけど、何か賄賂体質とかそんなことがあつて滞ったりするということはございますでしょうか。何か向こうでの政府の取り組みに対して何か困ってみえること、こんなことがいけないんじゃないかってことがありましたら、一つお話いただきたいということです。

それから、生命の危険は、私ならアフリカっていうのはそういうところで、3カ月もしたら2度3度死んでいると思いますけど、たいそう柔道もあれで体もご健康で奥さんもしっかりしてみえるということで、生きながらえて活躍してみえるんですが、私から考えると、大変危険な目に何度も遭われているんじゃないかと思えますけれども、病気も含めてそんなところをちょっとお話していただけたらありがたいですが。

島岡：

基本的に、賄賂って必ずありますよ。

俺は、基本的に払ったことないですね。でも、俺が基本的にやることっていうのは、あんまり賄賂の人間から突っ込まれることがないんで、まず物を送ってくる前にその役人と、これこれこういうものを送ってくるんで、ちゃんと無

税で出せよ、と言って、ちゃんと公式レターを書かせてから進めますから、俺は大丈夫ですけど、そういうふうにはやらないと、あちらの人みたいな目に遭いますね。だから、確かに賄賂体質があるのは間違いないことで、だけど、それをどういう形で進めていっていかってということで、ずいぶん変わってきますので、単にどこもかしこも全部が賄賂ってわけじゃないですが、ただ、そういう体質があることは間違いないです。

というのは、関税とかがすごく高いんですよ。例えば、車なんかを送るとしたら、100パーセント税金がかかるわけです。そここのところは安くしてもらおうと同時に、そいつになんぼかの金を払うという形になるわけです。だから、法律通りに100パーセントの税金を払えば、基本的に問題ないわけです。でも、なかなか払えないじゃないですか。だから、どうしてもそういう手を使ってやることになるわけです。基本的に賄賂に関してはそういうことです。

あとは病気、俺はマラリアとか肺炎とかは何回も罹っているし、マラリアと肺炎を併発したときも3回ぐらいあるし、フリーライターやっていたときに、ソマリアの戦場でライフルで撃たれて、そのまま刑務所に2週間ぐらいおち込まれたり、リビアでは足までマシンガン打ち込まれて乱射されて、そんなこともあったし。

まあ、それはでも、どこでもそうじゃないですかね。

質問者8：

強盗の話もよかったら。

島岡：

ああ、あれはケニアのモンバサっていうところに行ったときに、強盗に襲われたんですよ。こうやってポケットに手を突っ込んで夜歩いていたんですよ。そうしたら、ぱとこう人が路地から出てきて、あっと思ったら、いきなりそのナイフをここにこう突きつけられて、「あれっ、どうしたのかな」って思ったら、ばらばらと人が出てきて周りに6人、で、真真中にそいつと俺囲まれて、どうしようかと思ったんですね。

俺もそのとき若かったんで、まだ21ぐらいだったのかな。で、「ちょっとどうかな」と。相手7人で、刃物持っているのがこいつ1人だ、と。それがみんなに指示していたんで、「勝てるかな、どうしようかな」って思って、まあポケットに250ドルぐらい、その当時で言えば、4～5万円ぐらいしか入ってなかったんで、別にやってもいいなと思ったけど、でも、そういうふうにはやっぱり脅されて、くれてやるのもしゃくじゃないですか。それで、「よし、分かった。ちょっと待っているよ」ってこうポケットを、その時はジャーナリストだったので、ポケットにボールペンがあったんです。それで、「よし分かった」と金出すふりして、それで、相手のみぞをバアンって突いたんですよ。で、背の高いやつだったので、体がこういうふうには屈んできたわけです。ちょうどいい位置に顔がきたんで、そこにもろにバアンとかましてね、それから、もうメチャ

クチャですよ、あと6人じゃないですか。

とにかく1人1人飛びかかってやっつけて、こうやって振り向いて次の奴をやるうとした時にナイフでこう突かれて、一番初めにこうナイフを突きつけられて、それをこう振られた時にここをザクッとやられて、その次にここを突かれて、3回目にこう突いてきた奴を脇でこう止めて、そのまま投げつけて、その時に、持っているナイフを抜かれたんですね。ちょうどナイフの内側が向いていて、こここのところをザクッとやられて、3～4箇所切られたのかな。でも、傷は浅かったんで、それで3人倒して、あと4人残ったわけですよ。

それで、睨み合いになってね、で、これ以上はちょっとこれ厳しいなと思って、俺が怒鳴ったんですよ。そうしたら、向こうも怖かったんですね。向こうはワァッと逃げて、俺もワッてこっち逃げて、それでなんとか治まりました。

若い時は馬鹿なもんでそんなこともしましたけど、そんなことは日本でもあるんじゃないですか。

司会（津村）：

ご質問された方、予想通りの。

質問者8：

やっぱ破天荒な。

司会（津村）：

破天荒な人でございますね。

だいぶお時間がまいりました。もし、もう一方ご質問がありましたらですが、よろしいでしょうか。

これで最後の質問にさせていただきます。

質問者9：

すみません、最後の今の戦いを聞きまして、何を一瞬お話ししようかと忘れていたぐらいで、結局1点か2点増えたんですけど、そういった時に結局、先程信念を持ってということなのですが、そういった危機に面した後、結局どういった思いで、また前へ進んで行かれたのかっていうことと、あと、私もちょっとアフリカのタンザニアのほうに木を植えに、植林をしに行ったことがあります。で、アフリカの人たちがよく集うお店が東京にあったものですから、そこへ行った時に、アフリカの方に、木を植えるぐらいならお金をくれとか言われたのですが、実際アフリカで自分たちの手で植林をしていかないと、あちらは薪なのでガスとかも基本ないですから、木がとても大切だと。ただ、気候上どうしても日本のように簡単に木は生えてきませんから、それを自らの手で木を育てて植林をしていこうと、その村の人たちが活動しているのを、私たちが支援しに行っているのです。

そこで、意識改革をしていきたいっておっしゃったんですけども、アフリカ人の意識っていうもの、経済を発展していこうとか、生活していく上で、もともとアフリカ人の意識ってどんな感じだと受け止められますか。やっぱりすご

い陽気で助けてあげたくなるんですよ。で、資源はやっぱりありますし、今中国からもそうやっていろいろあると思うんですけど、島岡さんの目指すアフリカ人の意識改革というのはどういった目標があるのか、ちょっとお聞きしたいんですけど。

島岡：

だから、意識改革に関しては、さっきも言いましたけど、仕事が無いから、結局、金くれてことになるわけ。だから、長い間の、ずっと植民地生活の中で、そういったその奴隷根性っていうか、それが身に付いちゃったんでしょね。

それまでは、アフリカ人というのはアフリカ大陸の中で、普通に農耕しながら平和に暮らしていたわけですよ。そこにヨーロッパ人が入ってきて、植民地にして、そこからいろいろ搾取して。だからそういう奴らから金をもらうのは当然という意識になっちゃったんでしょね。

今は時代が変わって、植民地から国として独立したけども、やっぱりよく話すことっていうのは、さっきも言ったように、先進国の援助がないと自分たちは何もできない、とよく言います。だから俺は仕事を作って雇用を増やすということで、それを変えてきました。自分で稼いで自分で暮らしていくんだっていうのは、みんな分かっていますから、今のうちの漁師たちとか運送の連中とか柔道の連中とかで、金を借りにくる奴はいません。

あとは、ちゃんとした雇用のメンバー、漁業でも運送でもそういうメンバー制を布くっていうことですね。この船はこのメンバー、こいつと、こいつと、こいつが乗っていくんだって。だから、その人たちはその船を「自分の船だ」という気持ちを持って、毎日漁に出ていくわけです。

それまでの漁業は、船のオーナーがいて、キャプテンだけが決まっている。船長だけが決まっているわけ。その船長が、今日おまえと、おまえと、おまえって言って連れて行って漁に出る。次の日はまた、そのキャプテンが適当に選んで連れて行くんです。

だから、みんな、「自分の船」という意識がないわけです。キャプテンだけはそういう意識あるけど、そのほかはそういう意識がない。それを、うちの会社の場合はメンバー制を布いて、この船はこの十何人の人数で行くとか、この船は二十何人このメンバーで交代要員は何人。「この船はおまえたちの船なんだ」という気持ちを持たせるためです。このメンバー制を布いたことによって、やっぱり自分たちの職場は自分たちの船、自分たちがこれで食っていくんだから、これを守っていかなきゃいけないっていう気になっていきました。

それが、意識革命だと思います。俺がそういうふうにしたから、ほかの漁船たちもだんだんメンバー制を取るようになって、今はほとんどの船がそういうふうになってきたんじゃないかな。いずれは漁業組合でも作ろうかなと思っているんだけど、意識を変えていくというのはそういうことでしょう。

だから、日本から木を植えに行くのは、それでいいのかもしれないけど、やっ

ぱり現地の人間がそういう意識を持っていくようになっていくように、もっていかないとまずいよね。

それから、いろんな難に遭ってという話だけど、基本的に一言でいうと、俺に牙を向けた奴は、レクイエムを聞かせてやるっていうことです。俺は天命を受けてこういう仕事をいろいろしているわけです。でも、そういうことに対して嫉妬して妨害しようとしたり、さっきのは本当の強盗だけど、そのほかまあいろいろな妨害してくる奴とかいるわけです。でも、俺に牙を向ける奴は、なんだかんだいって没落したり、ろくな目に遭わないですね。酷い奴は死んじゃったり。天命を受けてちゃんと仕事している相手を妨害しようなんて奴は、ろくな目に遭わないです。だから、俺はそんなことがあったからといって、びくりともしないです。

これで回答になっていますか。

司会（津村）：

よろしいでしょうか。

お時間がまいりました。ありがとうございます。

私、最初に紹介したことで謝らないといけないかなと思っています。島岡さんのその生き様は、先程もいくつかありましたけれども、破天荒でもう私たちには刺激的だけど、役に立たない、という紹介をしましたけれども、今日お話を聞いて、本当に一人一人の人の力の大きさ、それから、志しの強さ、それから、人を変えていく、組織を変えていく、本当に関係の大事さを強く語って下さり、聞かせていただきました。十分役に立ちました。すみませんでした。

島岡：

ああ、そうですか。

司会（津村）：

小さなお子様から大プレゼントがまいっております。

フロア：

私、ザンジバルに住んでおります。娘と一緒に島岡さんの講演を聞きに来ました。南山大学出身ですので、はい、懐かしく思います。

島岡：

ありがとうございます。

司会（津村）：

どうもありがとうございます。改めましてアフリカ独立革命ということ、そして、援助に頼らない自立と真の独立を目指してといったことを、島岡さんのまさに志が、十分伝わる講演になったかなと思います。そして、島岡さんからのメッセージが、ここにいる皆さん方一人ひとりに届き、また、それが力になっていくのではないかと考えております。

改めまして、もう一度島岡さんに新たな拍手を。ありがとうございました。

島岡：

皆さん、どうもありがとうございます。

皆さんの生涯の中で、革命家に会うっていうのはおそらく俺1人だと思います。だから、こういう奴も1人いるってことを忘れないでください。本当に1人の力によって世の中は変わっていきますから、絶対に希望を捨てず、みんなでしっかり頑張っていきましょう。

ありがとうございました。

(文字起こし文責：紀要担当委員)